



平成 18 年 5 月 14 日
第 168 号
清野新聞社

上芭露の自然生態系

(五月連休帰省の帰途のフェリーで、暇に任せて書いてみました)

5月連休に実家である北海道網走管内のサロマ湖に近い農村「上芭露」に帰省した際に重大な発見をしました。

一 山野草の群落発見

清野農場には東隅に芭露川が貫流しており、その川向かいには昼



なお暗い神秘の沢があります。子供の時から遊び場

でアイヌネギがよく採れました。今回も季節がきてどうなっているかとトラクターに乗って皆で探検に行きました。

近くに行つて驚いたのは沢の周辺にニリンソウやエンレイソウの群落があり、一部は真っ白い花が咲いていたことです。エンレイソウは北大の校章でもあり、植物園でしか見たことなかったのですが、まさかこんな身近にあるとは思いませんでした。

よく見ると他にもネコノメソウやエゾノリュウキンカ(ヤチブキ)など多様な植物が展開されており、感動するほどの豊かな自然が残されています。

おそらく昔からあったのでしようが、子供の頃はアイヌネギやフクジュソウくらいしか関心がなく気がつかなかったのかもしれない。内地なら間違いなく保護区域に指定されるところです



二 生態系の変遷

北海道といえども、明治以来の開拓により自然生態系は決定的な影響を受けました。原始林は伐採されて農地に開発、開発できない斜面林もカラ松などの単層林に造林され、湿地も排水路が整備され、人間以外の動植物の生存環境は極めて厳しくなりました。

そんな中で農地にも造林もできず、人間にとっては利用価値の低い急斜面や沢地が原始のままに残されており、川向かいの沢はその一つであったのです。

我々が子供の時代は最も人口が多く自然に対して人間が攻め入っていた時代だったと思います。その後の過疎化によって、耕境が後退し、ある意味では自然が戻ってきています。今回も雪解けの早い道路沿いの路肩の草や秋蒔き小麦の新芽を悠然と喰っている鹿の群れを何度か見かけました。トラクタ

ーの後を狐がついて回るなど、子供の頃はあり得ないことでした。

ただ、農林業は二次的な自然として現況の生態系バランスを保持する機能も果たしており、人間が撤退した

から自然が単純に復活する物ではありません。間伐しない山林は根が深く伸びないため土砂崩れの原因となり、水田の耕作放棄は湿地の減少となり、全国的に生態系保全上の大きな問題となっています。

三 環境との付き合い

北海道における自然と人間との葛藤は明治以来百数十年続いてきました。私自身もまた最近の数十年で貴重な体験をしてきました。剛兄は大学で農学を専攻したことから、もともと生物に対する専門素養があると思いますが、私は農業土木を専攻したのであまり生き物には興味がなく、農地開発、ダム、水路などの土木工事で自然を破壊する側として生きてきました。ところが十数年前から公共事業



でも環境配慮が目的となり様変わりしました。最初は加賀三湖、霞ヶ浦、琵琶湖、諏訪湖などの水質保全に関わり、その後、岡山では「児島湖エコウエブ」、奈良では「大和高原ダルマガエル保護グラウンドワーク委員会」、水戸では「御前山ビオトープ」、守谷の自宅でも「立沢里山の会」と行く先々で新たな運動・活動を提唱・立ち上げし、いつの間にか一級ビオトープ管理士や環境再生医等の資格もとって、最近では自分でも仕事と趣味（遊び）の区別がつかなくなってきました。また環境の指標として多くの絶滅危惧種も見てきたために、今まであまり興味のなかった生き物の名前もかなり解る（同定）ようになりました。



いる同士が相互に金を渡しあつて担いでいる樽の酒を呑む。気がついていたら担いでいる酒だけがなくなっていた。世界が必死で騒いでいる経済発展とはお互いが渡す金を1文にするか2文にするかという程度のことだった。金持ちになる、偉くなる、贅沢するということが人間成長の目標であったが、実は大して意味のない事だった（人間の幸せや豊かさにはマイナスの側面も）ということに人間はもっと早く気づくべきだった。

恐竜絶滅の歴史に人間は何も学んでいない。身近な足下にこんな素晴らしい自然、日本特有の文化（伝統、食、芸術等）があるのに、経済合理主義、国際化の名目のもとで、その貴重な財産を自ら潰し、わざわざ高い金を出して危険な食料を海外から輸入する愚かさを今日も繰り返している。地球の歴史でも真に芸術や文化が発展したのはルネッサンス文化や元禄文化のような戦争や経済成長が終わって経済が停滞した時代である。日本も人口が減少に転じ、経済成



長も頭打ちとなった。これからが本当の豊かな時代になるのかもしれない。ただし経済や数字では表せない豊かさの時代へ。よく考えてみれば豊かな自然に囲まれ、安心して暮らせることが最大の贅沢

かもしれない。食料を手に入れるための重労働からさえ解放できれば、人間の幸せのためには、そんなに金、物、科学といった文明はいらないのかもしれない。かつて仕事でアフリカや南米のいわゆる貧しい農村をよく歩いたが、貧しいながら何処へいっても子供達は笑顔一杯で幸せそうだった。室内に閉じこもってゲームに夢中になり、親をも殺してしまうような日本の子供達の実に不幸そうな顔を見てしまうと、こんな文明国にしてしまった親世代としてすまないことをしてしまったという気すらしてくる。

そうしてみると、何のことはない、我々の子供の頃は農作業では大変だったが、自然に恵まれ（自然しかなかったが）本当は豊かな生活だったのかもしれない。コンビニはなかったが山に入ればヤマ



ブドウ、コクワ、ノイチゴなどいくらでも食べ物があつた。川の水はおいしく飲めたのでペットボトルは不要。蔓のハンモックやハシゴで遊べた。自然の中には毎日発見があつた。こんな生活を今再現しようとしたらとんでもない金と時間がかかり、これ以上の贅沢はないという結果になる。

人間を含めた生物にとって本当に大切な物は何かを教えてくれた北国の自然と故郷に今更ながら感謝している。

そんなことを考えながら、週末には近くの里山で近所の親父や子供達と「ビオトープ」つくりと称して泥んこ遊びを楽しんでいる。

四 豊かさと何か

養老孟司の「バカの壁」に出てくる、「八つあんの花見の酒樽担ぎ」ではないですが、樽を担いで